

Effects of Prolonged Night Shifts on Salivary α -Amylase, Secretory Immunoglobulin, Cortisol, and Chromogranin A Levels in Nurses

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2014-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 洋佑 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001522

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1459 号

長時間夜間勤務が看護師の身体に及ぼす影響

(Influence of long-term night-shift work on nurses)

森田 洋佑 (もりた ようすけ)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、看護師の疲労およびストレスに対し、非侵襲的で簡便に採取できる唾液の成分を用いて、生化学評価を行った論文である。

24 時間継続で患者のケアを行う看護師の勤務シフトは 24 時間を 2 分割し、日勤 8 時間、その他の時間を夜勤 16 時間とする 2 交代勤務が取られ、夜勤 16 時間の長時間勤務は、看護師の心身を疲労させる。また、高いストレスによりバーンアウト（心身ともに燃え尽きる）に陥りやすく、医療ミス発生につながる等報告されているが、夜間の 16 時間勤務が生体にどのように影響を及ぼしているか明らかにされた研究は少ない。

今回、順天堂大学倫理委員会の承認のもと、同意の得られた順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院の看護師 25 名で行った。唾液成分の指標としては α -Amylase、s-IgA、Cortisol、Chromogranin A を用いた。

この実験では、 α -Amylase 活性は、夜勤者の活性が日勤者と比較して高かった。s-IgA は、日内変動を示したが、勤務日での変動が少なく、夜勤者では 1 勤務目と 2 勤務目で異なった変動を示した。Cortisol は、休日は日勤者と夜勤者共に同様の動態を示した。日勤者は日内変動動態を示し、夜勤者では、勤務前が高い値を示し、休憩前に低下、休憩後に増加、勤務終了後（午前中）に低下するという動態を示し、勤務開始が朝であるかのような動態を示していた。Chromogranin A は、夜勤者の値が、日勤者と比較して高かった。

以上の結果より、本実験は夜勤 16 時間勤務がサーカディアンリズムの変調をきたしていることが示唆された、貴重な研究である。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。